

主日礼拝10月9日（日）

題 「偽教師について（I）」

テキスト：ペトロの手紙Ⅱ 2章1節1～10a節

皆さん、おはようございます。

わたしは、昔、親から子どもの頃聞いた話で今でも覚えている怖い話があります。それは、「地獄に落ちたら閻魔大王に舌を抜かれる。」ということでした。また、学校の入る所にある大きな石の門があったのですが、「嘘をついたらあの石になる。」と言われた時は、恐怖で心が震え上がりました。

日本にはこのような怖い話で警告して子どもを育てるような話がいろんな地域であるようです。淡路島にもそのような話はあるのではないのでしょうか？これは世界中にあることだと思います。ペトロの第Ⅱの手紙には警告する内容があります。

ところで、

今日の小見出しには「偽教師についての警告」とありますが、

わたしは今日の個所を読んで、正直、ドキッとしました。わたしも日本キリスト教団では教師と言われている者たちの一人です。

ペトロは説明しています。

「1:かつて、民の中に偽預言者がいました。同じように、あなたがたの中にも偽教師が現れるにちがいありません。彼らは、滅びをもたらす異端をひそかに持ち込み、自分たちを贖ってくださった主を拒否しました。自分の身に速やかな滅びを招いており、」とあります。先週、少しふれましたが、旧約聖書にも偽預言者のことが出て来ます。イザヤ書やエレミヤ書やエゼキエル書などにも記されています。預言者とは、神さまの言葉を聞いてそれを人々に語る者です。そのために集団で住んでいたグループもあったようです。預言者は時に王の前で命がけで語ることもあったのです。神から聞いたことばを曲げて語ってはいけないのです。実際、王に殺された預言者たちもいました。

しかし、神に聞いていないのに、聞いたかのように自分たちの考えを語る人々もいたのです。そのような集団もあったのです。王にとりいろうとする集団の人々です。そのような人々が偽預言者と言われます。

神の子イエスがこの世に来られ、福音を語り、十字架に死なれ、そして復活された後、時がたって、キリストの群れ、つまり教会が地上に生まれました。その群れの中に、偽教師たちが入り込んで来たようです。それがペトロの手紙で警告されているのです。

「同じように、あなたがたの中にも偽教師が現れるにちがいありません。彼らは、滅びをもたらす異端をひそかに持ち込み、自分たちを贖ってくださった主を拒否しました。」**「異端」**とは何でしょうか？辞書の広辞苑では異端とは「正統からはずれていること。また、その時代において正統とは認められない思想、信仰、学説など。」と説明されています。気をつけるべきことは、異端だと決めつけ、裁くことは慎重でなければならないと思います。

異端とは、そのグループの教えの内容に関することです。

今問題となっている、旧統一教会の教義、教えは、正統的なキリスト教会では認められません。旧統一教会の教祖は、自分を主イエス以上の存在とみなしているからです。ちなみにキリスト教の広まっている、韓国では、旧統一教会は異端とされているようです。ちなみに「先祖の崇り」とかいう考え方は、イエスの教えとは相いれないものです。日本では伝統的に「崇りとか呪い」とか昔から言われます。ある意味、そのような伝統に生きて来た日本人は旧統一教会に引っ掛かりやすいのかもしれませんが。思い出すのはヨハネによる福音書9章(P184)の主イエスのことばです。生まれつき目の見えない人の存在を先祖や親の罪の結果とみていた当時の社会的風潮やそう思っていた弟子たちに向かってイエスは「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである。」とはっきり言われました。これは画期的な教えであり、良き知らせ、福音なのです。

キリスト教において、異端は「自分たちを贖ってくださった主を拒否しました。」とあるように、イエスをキリストであり、主である、と認めないことです。「ただイエスはキリストであり、主である」との解釈はいろいろありえると思います。ただ「イエス・キリストは主である。」という信仰の告白、教えがキリスト教の教えの基本なのです。使徒信条の最初に「わたしは、天地の造り主、全能の神を信じます。わたしはそのひとり子、わたしたちの主、イエス・キリストを信じます。」とある通りです。

しかし、人間でも組織でも、自分や自分たちの考えは正しく、相手は間違っている、異端であると決めつけてしまうのは問題だと思えます。丁寧に慎重に考えて行く必要はいつでもあるのです。

ペトロは警告します。

「4:神は、罪を犯した天使たちを容赦せず、暗闇という縄で縛って地獄に引き渡し、裁きのために閉じ込められました。」と言われます。

地獄は黄泉よりももっと下の暗黒の深淵、深い淵と考えられていたようです。

「5:また、神は昔の人々を容赦しないで、不信心な者たちの世界に洪水を引き起こし、義を説いていたノアたち八人を保護なさったのです。」

これは、旧約聖書の創世記にある有名な出来事で、地上が大雨大洪水のために滅んだのです。神に従ったノアとその家族だけは救われという話です。「ノアたち八人」とは、ノアの家族ですが、ノアが人類の先祖のアダムから数えて8番目の人だからと数えています。厳密に言えば10人目になるようです。「不信心な者たち」とは、自己本位に悪に生きる者たちのことです。

「6:また、神はソドムとゴモラの町を灰にし、滅ぼし尽くして罰し、それから後の不信心な者たちへの見せしめとなさいました。」とあります。

「ソドムとゴモラの町」は死海の南にあった町ですが、悪が町を支配し、ついに神によって滅びることになります。今では死海に沈んだとの言い伝えもあります。ただ神を敬う善人のロトは助かりました。ロトの妻は逃げる時に「後ろを見てはいけない。」との神の命令に背いたので、「塩の柱」になったという一度聞いたら忘れられないような有名な話が聖書の創世記にはあります。死海は塩分濃度はとても濃く、人間が浮くことができます。また死海の周辺には今でも塩でできた白い柱のようなものがあります。

「7:しかし神は、不道德な者たちのみだらな言動によって悩まされていた正しい人ロトを、助け出されました。

8:なぜなら、この正しい人は、彼らの中で生活していたとき、毎日よこしまな行為を見聞きして正しい心を痛めていたからです。」

「心を痛めていたからです。」この言葉には「拷問にかける」という意味があるとのことで、それほどロトは人々の悪の前で苦しんでいたということです。とても、心に残ることばです。わたしはロトの姿に十字架のイエスさまの苦しみを重ね合わせる思いになりました。でも、この心の痛みが、神により頼む者たちには切なる祈りをもたらすのです。その意味で心を痛めるという事は、決して無意味ではなく、信仰者が正しいことのために苦しむことは、そこに「祈りの柱」が立てられることになるのではないだろうかと思わされます。これは神さまに届く働きだと思うのです。そして苦しむ人たちとの連帯をもたらして行くのです。

最後に、10節には、

「10:特に、汚れた情欲の赴くままに肉に従って歩み、権威を侮る者たちを、そのように扱われるのです。」ということです。

この中で「権威を侮る者たち」とは、「主の主たることを軽んじる」と訳している聖書もあります。つまり「神が主であることを軽んじる」という意味です。そこから、独裁的な人間や、自分や属する組織、また国が主であるかのように振るまう傲慢な者たちが表れるのではないかと思わされます。しかし傲慢な者は、結局最後には暗闇に沈むという警告なのです。

わたしたちと教会にとっては、主イエスを主とする信仰、そして祈りつつ互いに愛し合う、大切にして生きることこそが、最も確かで安全で神の恵みに生かされ生きるために大切なことであると学ぶのです。そのことを信じて歩みたいと願います。

主の平安を祈ります。